

YAHOO! JAPAN ニュース

いまや学校給食の牛乳の4割が「パックから直飲み」の時代に

“ストローなし”が進んだきっかけとは？

子どもたちが楽しみにしている給食の時間。一人ひとりに配られる牛乳パックには、かつて当然のようについてたストローは見当たりません。今、全国の学校で、牛乳パックからの「直飲み」が主流になりつつあります。そのきっかけやメーカーの工夫取材しました。

学校給食の“ストローレス”の流れに先鞭をつけたのは、2020年に登場した直飲みしやすい牛乳パック[School POP]です。

開発したのは、日本製紙です。国内の学校給食では年間15億本の紙パックの牛乳が提供されており、うち8億本を日本製紙が製造しています。同社によると、そのうち6億本がすでにSchool POPに置き換わったそうです。

従来のパックとの見た目の違いは、飲み口の下に弧を描く線が1本と、弧に直行する縦線が1本増えただけ。この工夫が、パック本体から飲み口への傾斜をなだらかにし、牛乳が勢いよく飛び出すのを防ぐといえます。パックの屋根部分の隙間が狭いので、指が入りににくく、配膳中に口をつける部分に触れることがなくなり衛生的です。開きやすさと漏れにくさを両立させるため、開発には1年かかったそう。直飲みを推奨しつつも、直飲みが難しい子のために、あえてストローの穴は残しています。同社紙パック営業本部の増田順一さんは、「基本は従来のパックと同じ形のため、乳業メーカーは設備投資が不要で、採用のハードルが低いことが強みです」と話します。

2015年、鼻にプラスチック製ストローが刺さったウミガメの動画が世界を駆け巡りました。南米コスタリカ沖で撮影されたもので、これをきっかけに世界中で海洋のプラスチックごみが問題になり、プラスチック製ストローを廃止しようという動きが起こりました。日本製紙も紙製ストローを開発したものの、「プラスチック製の数倍の価格となり、給食用としては売れずに一般化しませんでした」（増田さん）。そこで、発想を転換し、ストローを使わないで飲めるパックの開発に取りかかりました。

ストローレス紙パック「School POP」を最初に導入したのは高知県のひまわり乳業。県内の学校給食用牛乳の3分の2を生産する同社は、2021年にストローレスパックに切り替えました。同社は「2050年には海洋プラスチックごみの量が魚の量を上回るという予測もある。老朽化した機械の刷新に合わせて、子どもたちの未来によいものにしたい」と導入を決断。学校から「1年生は開けられないんじゃないか」という声が出たため、開け方の動画を用意して、パックにQRコードを載せる工夫をしました。ただし、導入してみると、子どもたちはすぐに開けられるようになったそうで、飲み心地にも抵抗はなかったといいます。

School POPは、これまでに24都道府県の乳業メーカーに採用され、急速に普及が進んでいます。ストロー1本を0.5グラムとして計算した場合、全国で300トンのプラスチックを削減できる見込みで、これはペットボトル3000万本に相当する量です。それでも、増田さんは「ストローの削減そのものが環境にいいというより、考えるきっかけになる教育効果が評価されています」と言います。School POPを紹介するホームページに学校の先生から感想が寄せられることも多く、「紙パックはメーカーとの取引が中心で、消費者の声に接することがこれまではなかった。とてもうれしく思います」と手ごたえを感じています。

■ 親世代が驚く光景も、将来は当然に？

かつて、瓶などの容器に直接口をつけて飲むことは「ラッパ飲み」と呼ばれ、行儀が悪い行為とされていました。しかし、ペットボトル飲料の普及とともに、今では一般的になっています。増田さんは「子どもの頃に身に付けた習慣は強い。ストローレスパックで育った子どもたちが大人になる頃にはパックからの直飲みが標準になれば」と期待しています。(取材・文／大野有希子)

(令和7年10月21日(火)7:01配信 YAHOO JAPAN ニュースより一部抜粋)